

ビジュアル版

考古学 ガイドブック

小野 昭



01	考古学・考古学者とは	4	07	考古学の「時間」	28
●	さまざまな考古学		●	時間にはさまざまな「幅」がある	
02	なぜ発掘調査がおこなわれているのか	8	08	「同時に存在した」ってどういうこと？	32
●	学術発掘と緊急発掘		●	「同時」をどうとらえるのか	
03	考古学は3Kな仕事？	12	09	どうやって「時代」を区分しているのか	36
●	いろんな発掘があるものだ		●	世界の時代区分	
04	発掘は最大の武器	16	10	私たちの朝の食卓が後世に発掘されると	40
●	発掘調査の新しい手法と目と手の判断		●	生活の解明	
05	土器の編年が考古学を鍛えてきた	20	11	実測図に惑わされるな	44
●	土器編年を組み立てる		●	実測図の特徴	
06	さまざまな時間感覚	24	12	分布論に冒險する	48
●	時間は下っていくのか上っていくのか		●	分布から見えてくるもの	
13	比較の大きい可能性	52	19	私の歴史？他者の歴史？	76
●	比較は歴史的方法と結びついてはじめて効力を生む		●	感情を移入して過去を抱きしめればいいのか	
14	復元とそれを確かめるには	56	20	考古学者が書いた歴史は面白くない？	80
●	復元模型の製作と検証		●	考古学者のさまざまな試み	
15	文化財は残ったのではなく作られる？	60	21	遺跡は誰のものか	84
●	新たな目で見た文化財		●	現代社会と文化財	
16	太古の人骨のあつかに制限はあるのか	64	あとがき	88	
●	遺体・遺骨と考古学		参考文献	90	
17	分布の広がり与国家	68	引用文献	92	
●	考古学与国家		写真提供・図版出典	93	
18	多様化・国際化する考古学	72			
●	研究・支援・普及で世界をむすぶ				

考古学・考古学者とは

考古学と聞いて何をイメージするでしょうか。

世紀の新発見、誰も知らなかった太古の人びとの暮らしの解明、インディー・ジョーンズのような探検や冒険を思い描くかもしれません。みな、考古学に付随するさまざまな姿を反映したものです。新聞、テレビをはじめ、さまざまなメディアを介して考古学のイメージが生みだされ定着に一役買っています。記事や放映のカメラアイは発見の場や時を選ぶので、そこにいたるまでの地味で、はるかに長い時間を費やす作業のことは報道されません。

「ロマンがあつていいですね」と言われます。考古学研究者がもつとも違和感を覚える瞬間でしょう。なぜか。人類の無限に多様な生活痕跡の一端が明らかになれば、そこにはあこれや冒険や夢をかきたてる何かがあるかもしれません。しかし、考古学者の日々の作業にはロマンの入り込む余地はほとんどありません。「いにしえの異国へ時空を超えて……いいなあ」などと言われると、考古学の作業は空中に遊ぶような華やかな感じですが、実際はま

るで反対で、考古学は扱う資料の時間（編年）と場所（分布）にがんじがらめです。発掘までの手続きや調査の段取りが複雑で泥臭く、発掘した後も発掘調査報告書^{*}刊行までは長い時間のトンネルがどこまでも続くような手間のかかる仕事です。

「いいわね、あなたは、趣味が職業で……」などと言われるともう狼狽の境地です。考古学も、独自の目的と対象と方法に支えられて仕事をするほかのさまざまな科学と変わりません。

さて、考古学は現在、動物考古学、植物考古学、民族誌考古学、地考古学（ジオアーケオロジー）、遺伝子考古学、認知考古学、ジェンダー考古学、骨考古学など、「〇〇考古学」の分野がたくさんあります。考古学の方法が多様化し、関連分野との連携研究が深まって、こうした新しい分野が生まれてきたのです。

多様な展開が始まる前の一九五六年に、著名な考古学者V・G・チャイルドは、考古学の方法について書いた本の序文で「考古学は一つである」と言っています。いまでも「その通りだ」という立場もあれば、「もうそんなことは言えない」とする立場もあります。

歴史を知る手段としての考古学は、年代測定の方法の進歩や他分野との協同によって多様化していますが、私は、中心となる考古学的方法的な核は堅固にあると見る立場です。一言でいえば、遺物の形と組み合わせによる編年と分布、発見される地層と遺物の関係などを明らかにする一九世紀中ごろに確立した方法は、時の経過にも風化せず中心にあるということです。社会から遮断されて天から舞い降りるような考古学研究はありません。本書では、現代社会の中の考古学とは何かを意識して話を進めることにしたいと思います。

^{*}発掘調査報告書

遺跡は国民の共有財産であるので、調査結果は可能な限り正確に記録して残すことが義務づけられている。

^{*}V・G・チャイルド『考古学の方法』

発掘の方法を記したものはなく、考古学の用語、依拠する方法の前提、作業の土台となる根本原理を説明した優れた著作。

01 さまざまな考古学

現在、考古学にはさまざまな分野がある。遺跡で発掘された考古資料について、通常の考古学分析だけでなく、試料の自然科学的分析が多様な分野でおこなわれている。新たな分野への方法上の開拓や知識が話題になるが、そうしたさまざまな分析の結果を総合して、歴史的に考察する独自の考古学的思考が重要である。



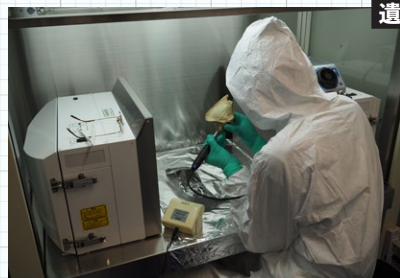
植物考古学

土器底の痕跡をとり縄文時代の編み物やその植物を調べる。



環境考古学

ボーリング調査で採取した地下の土層から過去の気候や植生など古環境を調べる。



遺伝子考古学

他のものが混ざらないクリーンな環境で骨からDNA分析するための試料を採取する。

地考古学

Geoarchaeologyの訳。地球科学の手法と概念を適用して考古学的調査研究をおこなう。野外調査ではとくに層序学、遺跡形成過程、景観復元が重要な領域であり、伝統的な考古学データの解釈を深めることができる。



動物考古学

環境考古学

遺伝子考古学

地考古学

植物考古学

実験考古学

民族誌考古学

ジェンダー考古学

認知考古学

さまざまな考古学

実験考古学

発掘調査でわかった当時の動植物を、復元した土器で煮る。つまり、実験考古学は当時の社会関係を捨象した近似の追証である。



民族誌考古学

現在の編み物づくりから過去の編み物を考究する。



ジェンダー考古学

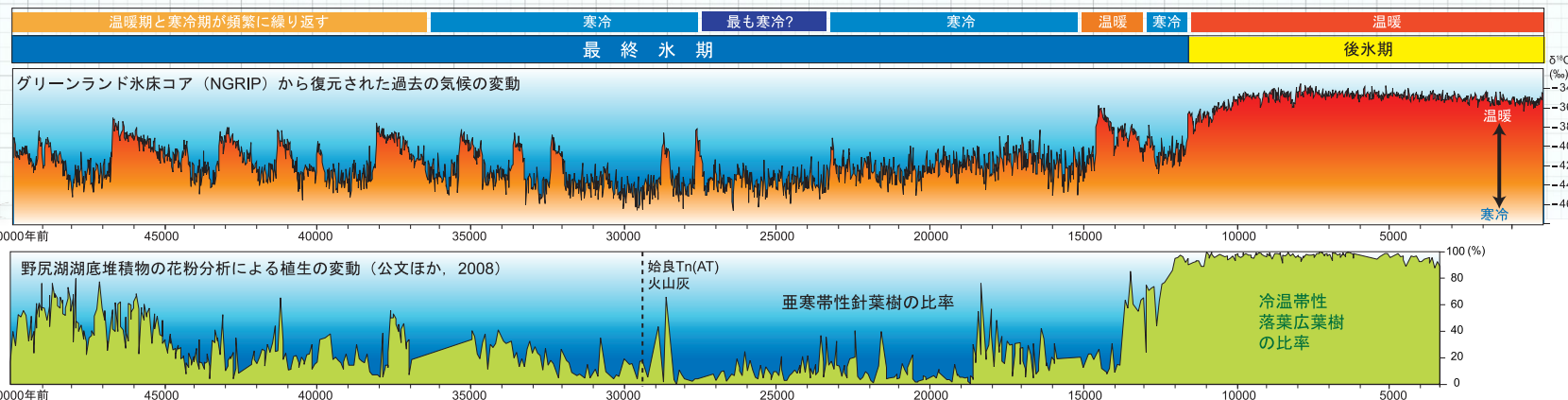
生物学的な性差による分業や、性と象徴に関する文化現象を、現代の価値基準から固定的にとらえるのではなく、文化的多様性の視点から物的証拠にもとづいて史的に研究する。

認知考古学

過去の人類の推理・思考の認知的要因を物的証拠にもとづいて探る。

里浜断面調査

さまざまな考古学があるが、考古学の核は遺構・遺物を見る人間の目だ。里浜貝塚で何層にも積み重なった貝層を分別していく。(宮城県・里浜貝塚、白い紙片は層名を記してある)



過去的环境変化

気候・植生の変遷に動物化石と遺跡の変遷を入ると、人類活動の痕跡と自然環境の時間的対応関係がわかる。環境変化と人類活動の相関を明らかにするにはさらに説明が必要だ。それが因果関係を反映しているか否かを知るには、さらに突っ込んだ具体的研究が必要である。

考古学では「シリョウ」とよく言うが、シリョウにもいろいろある。3種のシリョウの使い分けに注意しよう。

- ①「資料」material = 考古学では包括的にこれを使うことが多い。
- ②「試料」sample = おもに自然科学的な分析用に対象物を採取するさいに使う。
- ③「史料」written document, written record = 文字として記された記録に使う。

なぜ発掘調査がおこなわれているのか

遺跡の発掘件数と日本の経済活動の間には明確な因果関係があります。戦後の復興期、高度経済成長期、バブル経済とその崩壊の時期など、経済動向と考古学の遺跡発掘件数の変遷はそれを示しています。

発掘を便宜的に二つに分けると、第一は大学、博物館、研究所などの機関による課題解明の研究目的に沿った学術発掘、第二はビルを建てたり道路をつくるなどの開発行為にともなっておこなわれる緊急発掘（行政目的の事前発掘調査）があります。

大きな違いは調査規模、予算、調査期間にあらわれます。学術発掘は、小規模・継続的で予算も少なく、一回の調査期間も短いのが普通で、年間調査件数も三〇〇～四〇〇件の間で推移しています。一方、緊急発掘は調査の規模と予算の桁が違います。年間調査件数も二〇一九年の統計では九一四六件で、全体の約九六パーセントを占めています。

保存の努力と関係各機関との調整の結果、やむを得ず実施する事前の緊急発掘でも、調査

に要請される内容は学術調査と同じであり、本来、発掘の内容に違いはありません。しかし多くの場合、遺跡地はビルや道路になってしまっています。「記録保存」などと言われていますが、遺跡は残らず発掘調査報告書だけが残ります。

遺物・遺構の新発見は、緊急発掘の成果による場合が圧倒的に多いのが現実ですが、日本の遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地^{*}）は公称四六万カ所といわれていますので、将来の保護が危惧されています。

いま、遺跡の発掘件数を示しましたが、そもそも遺跡がそこにあることがどうしてわかるのか、と問われることがよくあります。その答えは、もともと基本的で地味な分布調査の成果によるものです。都道府県、市町村の文化財担当部局（多くは教育委員会）の責任において、担当者、ボランティア、在野の研究者などの協力を得て全国くまなく定期的に遺物・遺跡の分布調査を実施し、自治体の遺跡台帳^{*}への登録が実践されています。表面採集した遺物の時代を判定し、台帳に登録する、いわば目と手と足で確認する分布調査の情報が基本です。遺跡台帳は通覧できるので、開発にあたっては事前に遺跡地を避ける努力と調整もおこなわれています。

遺跡の調査件数が多いということは、いままで知られていない新しい発見の機会が大きくなることを意味しますが、適切な保護政策と一体に運用されなければ、遺跡消滅の危機は増大します。遺跡の事前発掘は、こうして現代の経済開発の現実を反映させながら、チャンスと危機が表裏一体となって展開しているのが現実です。

^{*}周知の埋蔵文化財包蔵地
「貝塚、古墳その他埋蔵文化財を包蔵する土地として周知されている土地」と文化財保護法第九三条で定義されている。考古学の遺跡、考古資料とほぼ同義である。

^{*}遺跡台帳
原則として自治体の教育委員会が作成する。遺跡の名称、時代、種類、所在地、範囲、おもな出土資料などを記載した台帳で、一般の閲覧が可能。遺跡地図と合わせて遺跡保護の基盤をなす。

02 学術発掘と緊急発掘

さまざまな開発にともなう大規模な行政発掘で新たな遺跡が姿をあらわし、予想もつかなかった発見があり、マスコミがこれを取り上げると、「これが考古学だ」と思われるだろう。それは現実の考古学の一つの姿であるが、調査の記録が残ったとしても大多数の遺跡は破壊され消滅していく。

その一方で、小規模で目立たない地道な学術研究調査が日本では年間300から400件前後おこなわれている。そこに考古学の調査の原点がある。内発的な問題意識と課題の設定、発掘調査の立案と実践、分析と報告による調査成果のアウトプット。その自己点検・評価を踏まえ、さらに調査の戦略を練って発掘を実施するというサイクルである。

大規模な緊急の行政調査でも、研究機関による小規模な調査でも、共に科学的、学術的でなければならない点は同じだ。

三内丸山遺跡（青森県）の大規模な発掘調査

当初、野球場建設にともなう行政調査だったため、調査区域が球場の形をしている。

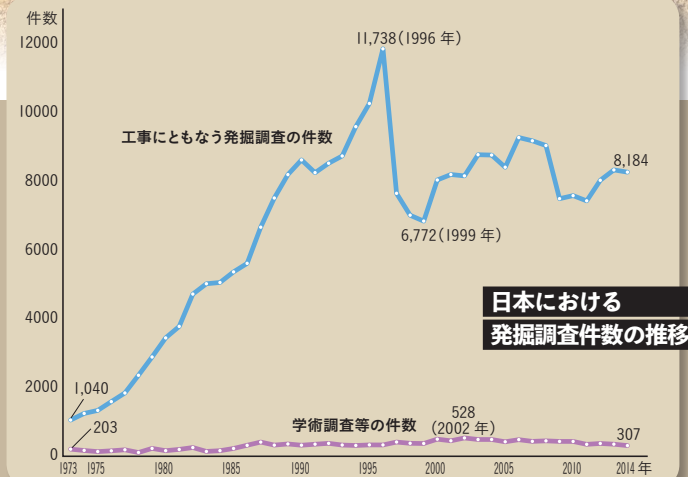


広原第1遺跡 （長野県中部山岳地帯）

海拔1400m。旧石器時代から縄文時代中期まで断続的に利用された。黒曜石原産地の近くがどう利用されたのかを詳細に探査する端緒となった小発掘。

ウラーフェルゼン遺跡 （オーストリア北チロル）

約1万年前の中石器時代初頭の遺跡を高地（海拔1869m）で精査する。



日本における 発掘調査件数の推移



フランツ・ゼンヒュッテ 第1遺跡 （オーストリア北チロル）

海拔2147mの山岳地帯の巨岩の上に薄く堆積した中石器時代後半（約6500年前）の地層を掘る。テントが遺跡の範囲。おそらく世界で最小規模の調査面積だろう。

©Dieter Schäfer



©Dieter Schäfer